前說排悶録 前編 一

特別
へ21
2460
2

酉 尾定

奇説排門録巻之二

忠義之部

目録

張夫子　闇典史
張襲　歐敬竹
石士鳳　凌國俊等九人
蕭効用　孔四郎
費宮人　呂尼
瓊枝曼仙　義象塚
義牛　義馬

御 ～621 号 2460 巻 12－2

秦氏犬
毘陵猴
龍
合十九種

義犬
義鶴

奇説排門録巻之二

忠義之部

張夫子

明の崇禎辛巳の初。永平地名の兵備道兵備ハ要害の地道ハ街道ハ張春と云者あり。陝西地名より孝廉親ニ孝ありて廉直の徳ある人より撰まれしもの舉らまゝ人なり。清の兵城を攻る時。張春少く戰ゝ力つきて生捕る。太宗皇帝の御前ニ引出さるゝ。されども屈服せざゝ。衆之を殺さんと欲す。上許ゝ玉つゞの闕廷禁裏ニ至らしめ其忠義を高ゝと賞じ給ふ。旂下の士ニ命じ給ふ。張公ニ従ひ学ぶべゝ。との玉ふ。張春も亦辭せざゝ教ふる道義を以てす。皆敬ゝ之ニ事ヘ稱ゝ張夫子と云ふ。至ること必南ニ向ヘ明の都ニ終ニ清人の如く薙髮せず。上

六樹園八翁 譯

曲て之を從ふ臣下を君て曰。真の忠義の人なり。汝等之を学ぶべし。張春卒するを及て上深く歎息し王を。斯下の学者紙錢を以て奠て曰。敢て清德を汚さじと。天下定まりて後世祖章皇帝燕都を入るせるのち侍臣を君て曰。卿等昔日張夫子あるを知るか。南国を唯此一人あり。然るを之を識者なるを如何ぞやとの王ひなり。

閻典史

閻典史（閻は氏、典史は官名）は名は應元、字を靈亨と云へり。其先は浙の紹興（地の名）人なり。四世の祖某と云者錦衣校尉（禁中を守る官の名）となる。始北直隸の通州（国の名）人なり。應元掾史（下役人）より起て京倉大使となる。崇禎十四年江陰（地名）の典史となり。始て到る時海賊あり。船百艘ばかりを懼て

而来りて至て。乱れて内地を入る。其勢猛し城を近づきぬ。縣令は此時旁邑（近村）を往る跡あり。丞も（下役）主簿も恐れ怖きて男女唯逃るるをのみ。時に應元刀劍を帯び馬を躍らして大市を呼て曰。好男子たる者は我に從て賊を殺して家室を全くせよと。呼ばれて此声を聞て從ひ集る者凡千計あり。ぼうとぎも械のみを苦しむ。應元又馳て竹ある處に至て呼て曰。事急なり人ごとに一竿を假せ。直に我に取れ〳〵と云へり。千人の者江岸に列て並びて弔を林の如く立てり。應元かりごとあり。矢を發へり。一矢を放てば賊一人を射殺す。はぐけて賊三人を殺して。賊恐れて船に登て帆を揚て去ぬ。巡撫官（役）應元が功を奏す。勅して都司（上役）に仰有て応元を江陰（地名）の尉に仕へ。徽

廻とく田く賊を捕る吏を主どり〜む。是ふるを黄盖を張を纛を立く。前驅道を清つ行事格外ふ免さま〜成。邑人栄ありとせて。久く〜く勤功を以く廣東の英德縣の主簿とする。陳明選と云者応元ふ代く江陰地名の尉目付と成まり。應元母の病ふ依くいやゞ行ぞ。亦国の變ふ會ねまべ。家中の者を引つまゝ邑陳の砂山地名ふ居る。此歳乙酉の五月あり。此時清朝今の天下を得く。改元〜く順治年号といつる二年ふあさまり。豫王親王の大軍江を渡ま。金陵地名を降く君臣出く走る。宏光帝明帝尋で靴〜らま王ふ清清朝こゝを貝勒清の大將及它將を其外の將共遣し。東南の郡縣残取る。國々の吏或ハ降ま或ハ走る。又門を開く距む者あり。之を吹まふ輙校速なるハ時を以く計べく。遲も十日を過ぞ。京口の境より以南南の界

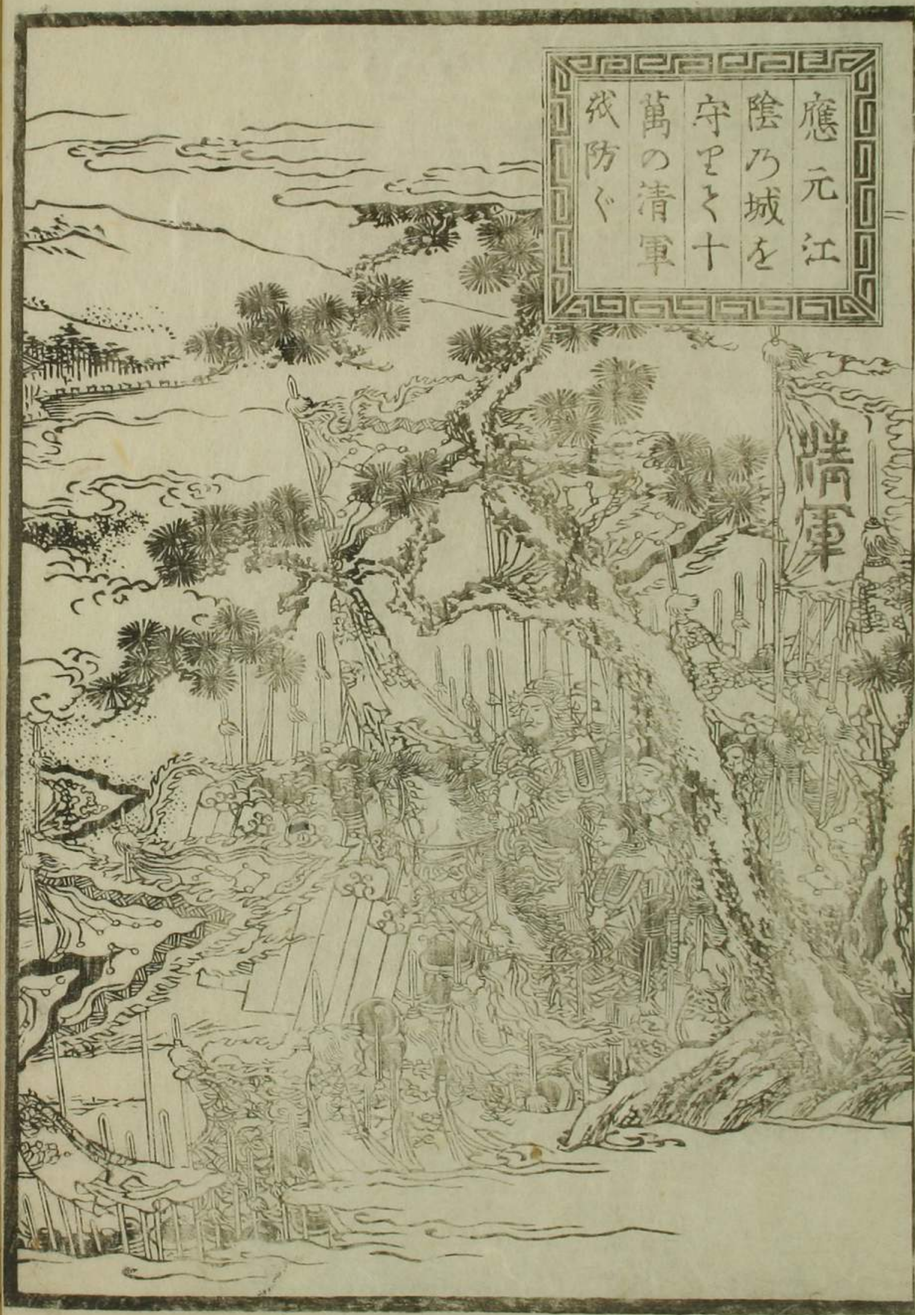
月の間ふ名城大縣を下ぞ百を以く數ハ。江陰の地のゝ彈丸の如き下邑ちまた。堅く守ゞ故八十餘日あり〜く下ゆあ。是ちく応元ゞ謀ふまり。初め薙髮ぞ令下ま時。諸生の許用德と云者閏六月朔日ふ明の太祖の御容を明倫堂ふ孔子を祭掛け。衆を率く拜〜且哭ま。士民集る者萬人ばかりも。此時新ふ尉ふりこる陳明選を推たく城を守るる義主ら〜めんとま。明選ゞ曰吾智勇闇君ふ及ぞ。こゝふ大吏ふ闇君を用べ〜とく。夜騎兵を弛せく應元を迎ふ。應元家丁四十人を率く夜馳く城ふ入る。此時城中の兵千ふ満こぞ家數ハ僅一萬ばかり。應元至ま〜く人數を筭へ見樓櫓を晋請〜。民の一戸ごふ一男子を出〜く城屏ふ乗せ〜ふ。餘丁ゆま

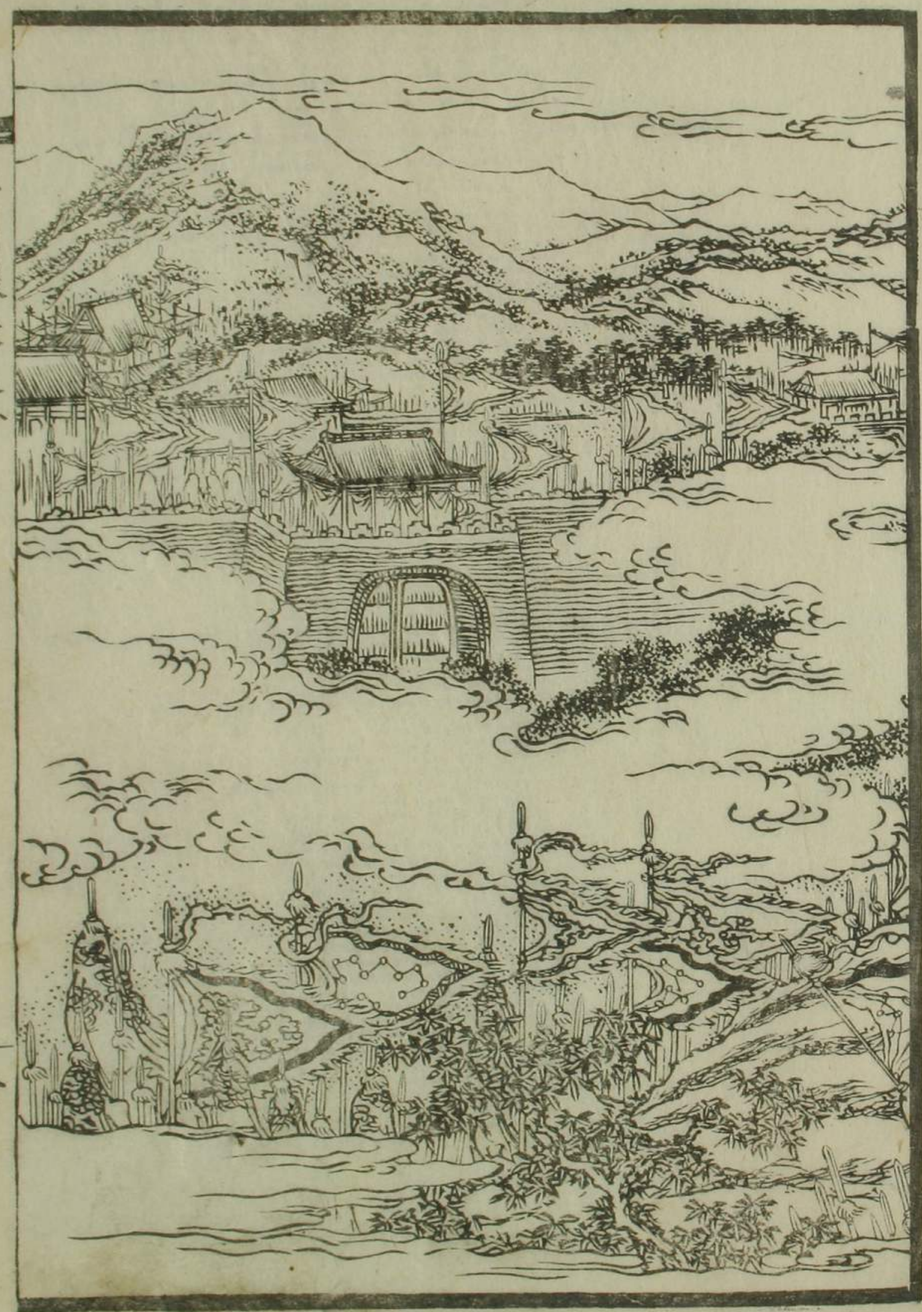
餐を運ぶ。又前の兵備道の曾化龍が製せる火薬火器を城樓に貯へ、又富める者に勧て財を出さしむ。令〻て曰、必金のみに非ず。糧・藏・帛・布・器物に至るまでも出さゞるべし。程璧と云者首て二萬五千金を出す。引續て出す者多くあり。城中に集まるの火藥三百罎。鉛丸・鐵子千石。大礮百。鳥機千張・錢千萬・緡・粟・麥・豆・万石。其外酒・醋・鹽・鉄・匏・藁等此に準ず。斯て分〻て城を守る。黄略とのふ者東門を守る。把總某南門を守る。陳明遐西門を守る。應元ぐうう北門を守る。仍四門を徼巡す。部署始て定まる時に城下を責る十萬の清軍。城の四面十重を圍て矢を射る事烈〻。城上疾を蒙る者少からず。城内ろも礮礮機弩を射出し

つ且べ。清軍是に於て死する者多し。其よりて大礮を出して城を撃つ。應元鉄葉を以て門を畏おゝ。鐵の組を貫て之を護る。又空棺に土を盛て潰て所を塞ぐ。敵又北城を攻む。北城に穴明きぬべ。人一人に大石一ツを運ばせ。壘を築くること一夜にして成る。城中矢少きゆへに應元計をめぐらし。黒夜に藁を束ねて人形を為て燈を持て城中の兵士垣内に伏し鼓を打て叫べ。其体縄に下て城を出て。敵の營を襲へとそゝのかす。清軍大に驚き矢を射ること雨の如し。夜明て矢を拾ふに算へべからず。又壯士を遣て夜敵の營に入て風に火を縱つ。清軍大に亂て相殺死せる者数千人。清軍城を卻て離ること三里にして營を作る。清軍責めずして帥大將

の劉良佐と云者。騎馬の兵を役へ城下に至り呼て曰。吾閣君と相識る。我為に閣君に言へ相見えんと欲すと。應元城上に立て共に語る。此劉良佐は宏光帝四鎮（四ヶ所の要害の守る）の一人にして。廣昌伯（廣昌は地名伯は其所の侯爵）に封ぜらる。然に清に降て今兵を総る者なり。時に應元に語て曰く。宏光帝は既に走て江南（明の都）に在り。君早く降て富貴を保つべし。應元曰。某明朝の一典史（小役人）なり。然れども大義を知れり。将軍は国の重鎮（重役）にして。江淮（領地）を保つ夏あらんに敵の為に前驅を抑何の面目あり。吾邑の義を知れる。士民を見んとする。良佐此言を聞て慙て退く。應元體大きく面蒼黑にして微髭あり。性嚴毅（生まれきびしく物ごきなり）にして。弱冠（二十歳）令明書（掟を明かに守ること）を意とせり。法を犯す者あれば必ず仕置

置く。少も許さず。されども財を軽んじて賞賜を惜む夏なり。傷つける者へは必ず創口を裹む。戰死せる者には棺を厚くして之を葬り。祭ること為に哭して。壯士と語る時は必好弟兄と稱して名を呼びざりけり。陳明選は寛厚柔和なる人なり。城を巡る毎に其士卒を慈み。勞する事に依れば涙を流す故に。両人共に士卒の心を得たり。皆此人の為に死せんと云ふ。是より先明の軍を統べ地を取らんとして。蘇松と云者を敗て郡を破り。師を率て此城を攻る。將に降る者両人生捕れり。降りて城に入る。城下に至て跪て。両将先泪を流す。應元城上に立て罵て曰。敗軍の將禽と成りて速に死せざる何の為に位やと呼る。清軍は又人を遣て諭して曰。四門を守る長なる者各一人


應元江
陰乃城を
守りて十
萬の清軍
戍防ぐ
清軍



を斬らバ即圍を解べしと云。應元声を厲しく曰。寧吾頭を斬る共何ぞ百姓を殺さんと之を叱つく玄しむ。中秋の時ハちるとけまゞ軍民ハ月を賞ぎる銭を與へ。其人を分ちく引つまく城ハ登らしめ酒を飲しむ。樂を制しく五更の比善謳ふ者ハ唱ハを。斯するゑ三夜ゑり。貝勒想ハハ此城内降る意ゑのとと云く。攻る事愈急ゑまゞ。鼓聲晝夜絶ぎ。百里の地是ゞ為ハ震動せり。城中死せる兵日を積く多く。哭聲聞えく止夏ゑ。應元義ゞを勵しく櫓ハ登く来配す。意氣自若平氣とこく常ハ變らぎゞ一日朝ゑり大雨降く日中の比紅の光一縷。土橋ゑり起ゞ直ハ城西を射る。時ハ城俄ハ陷まり。是清の軍ゑり大石火矢を放てるゞ。清軍烟霧雨を分く群ゞく城ハ登る。

應元必死の士百人を率く突く回ゞ戰夏八さゞ或殺さまゞ或傷つく者千を以く数ハ。再門ハ至まゞ門閉く出るゑ能ゞ。應元免まゞゞと度ゞ。前ゑる湖水ハ身を投ゑ多ハ。水項を没せぎ。劉良佐軍中ハ令しく必應元を殺さゞしく捕ゞと云。遂ハ縛せゑまゞ良佐乾明佛殿ハ足を延しく居多ハ。應元ゞ至まるをつく躍ゞ起く前ハ至ゞく哭ま。應元咲く曰。何を哭する。事まゞハ此ハ至る一死ハ多耳と。さく貝勒ハ見えく立く至せぎ一卒鎗ハく應元ゞ脛を貫く脛地ハ踣ひぬ日暮く應元を栖霞禪院寺院の名ゞの内ハ繋ぐ。僧夜聞ハ應元大ハ呼ゑり。速ハ我を殺せと云。終夜さゞ殺せくと呼多ゞ俄ハ寂とく吉ゑ。往くえまゞ既ハ死しく有き。應元城を守ゞそ

清軍の攻るゝ。ふせゞ守るゝ八十一日。清軍城を圍者。二十四萬人中〳〵く死せる者六萬七千人。巷の戰〳〵く死せる者又七千。傷つける者七萬五千餘人。城中死せる者五六萬戸。巷の満ち。然ま共一人も降る者無りゝ。城破る時。陳明選ゝちゞちの成〳〵く大の戰〳〵ゞ。兵備道の至て〳〵く身重創を負こまべゞ力を握て〳〵るゝく壁上の倚うゝく仆まずて死せりと。又或ハ門を閉て火を投〳〵く死せりとも云傳へゝる。

張聚

張聚ハ廣東布政陳選ゞ吏ゝり。明の成化年中中官の韋眷と云者。廣州を守て恣の民を虐を。時の番人夷の賈をゝる者の力麻と云者。舩を海上の泊め。蘇門荅剌国（ソモタラ国 夷の国名）の貢の使と詐貨物を賣らんとゝる。韋眷。利を欲さるゞ故の之を許さんとも。陳選其詐の知て之を逐ひ遣る。韋眷又越人王凱父子を海上の遣て私の番人の貨を買〳〵む。知縣ゝる高瑤と云人。王凱を執へ其贓を發き見るの巨萬あり。陳選都の之を訴ふ。時の巡撫都御史宋旻を目付こ下〳〵く問ハしめ王ふ。宋旻韋眷を畏まてく詰ゞ。陳選書を呈て高瑤を奬む。韋眷ゝゝ〳〵陳選を恨こ。陳選と高瑤と官物を貪まて告ゝまべ。帝大の怒刑部員外郎（刑罪の役人）木子行。発の巡按御史（目付）徐同愛の仰て之を鞫さ〳〵む。行と同愛と皆韋眷の阿て。計て陳選ゞ黜けゝる吏。張聚の賄〳〵く陳選の罪を負せんを頼む。聚後ゞ李行其時張聚を囚へ呵責をゝる。張聚ゞ曰死さんと

たゝくべ早く死せよ。私の憾を以て公義を滅し。正人を害せんやと云て
從へど。李行終に陳選が罪をあげて曰。勅を矯て其屬吏に官庫の
粟を貸さりと云を以て奏せ。陳選思らずして徒罪（徒罪ハ怪き罪也そ流し者
の科を蒙る。南昌地名に至て死る。友人張元禎此を葬る。張聚京
に赴て公役の人足に雇る）に至て。上書して云る。臣聞く周公の元聖なるも。四國の謗
なりて疑を致すを君に免さず（成王四國ヨリ十觸ゼテ流言を聚ク　曾參
周公旦を疑ひ）大賢に〳〵て三至の言杼を投るを母に免さず（和名抄杼機之○曾子の母
を殺すと三度告たれば　持織者也　曾參人其子を疑ひ〳〵て文元）是皆口に能金を鑠し。毀て骨を銷すべき物ある故
なり。陛下の明なる文日月に同く。恩は父母に齊し。何ぞ沾昌の中尚
屈に羅る。覆盆の下復冤に沈むるあらん。竊に考るに廣東の布政使

（重役の官名）陳選少〳〵く寔學を崇て。夙に孤忠を抱く。群邪の間に處り
喪身の地に立て。內官韋眷番人に通ずるを發て。知縣高瑤に命て
察せ。陳選書を作て之を奬む。不直を正せば監司の職なり。宋旻徐同
愛勢を怙奸を保。眷を〳〵く其意を恣にせしむ。陳選を誣て貪婪
と〳〵聖聽を熒す。李行命を受て訊と雖。韋眷が頭指を得て文を
曲て陳選を罪人とす。臣小吏なり。誤て法に觸れて
黜らる。寔に臣が罪なり。韋眷臣が憾を報んとして。臣に厚く賄
て陳選を罪に陷さんとす。臣小吏なりと云共。味心を以て是非を亂さ
む。韋眷乃李行を以て。臣を罪人と云て鞭うつこと數日。身中完き膚
なし。李行韋眷が言を承引て。陳選詔を矯て粟を其屬に與へ

其報を得んとすと云へり。是は共美を殺して夏姫とし。共妻は夏姫は淫婦伯夷
賢人首陽山に飢死を話く盗跖奸人盗跖が殺る人とするあり。近年嶺外の地大水あり。
民食すべき物なきに泉藩之を安ずるが如くせり。陳選獨憂へ。
上命の下らんを待時は民の命絶ぬ。仍て賑救て救ふ民の命を救ん
が為なり。他あるに非ず。陳選性のこと剛にして罪無しして奸人の虐を受
憤懣に任ず。徇徇として沮ぬ。李行速に死せんるに幸ひ。病中藥を與へ
ず。其養子を韋春がもとに遣す。陳選が卒せる旨告て喜びぬ。小人の
佞毒なる。此の如きを致せり。陳選行を潔して讒に罹る。君門遠して
誰か其寃を訴へん。臣罪を以て斥らること勿れ。死を目して申す。身は
路に着らるを惜まず。只忠廉の士を痛む。外に屈寃を負士あり。内
に讒佞のこと居る。聖明の累こと書く奉る。取上玉人夏
きるるるるど。其後他事を以て韋春が鎮守の職は罷らるるとぞ。

歐敬竹

歐敬竹は武進市の人なり。市の地名古短くして大言を好めり。生産無く
城南の戈橋に居り。人のるに敬て扇を脩て業とす。百錢を得て
獨市に出て飲む。大に酔へば古を卷て歌ふ。市中の人皆之を咲ふ。甲申
三月天子に變ありと聞て。明の亡るる事を言て聞て。隣人を招き共に曰。遠くして
別れん。汝我一杯の酒を盡せ。其妻壺を提て来る。敬竹を見て笑て曰
斯言吏を休よ。今舊官皆新官と作と聞る。此時明の代亡びて今の清朝となる。
我ら如き者何ぞ不ん。敬竹曰。嫗何ぞ知らん。其人此翁が死て故な

と云く。竟に戸を閉て自經て死ぬけり。

石士鳳

石士鳳も武進市の人なり。家貧く妻子あり。略字を識れり。僕なり。此僕も亦妻子あり。歐敬竹死しく後数日ありて。士鳳脯乾肉ゆるを買て其先祖を祭り。拜して且哭し。哭して鄰人を邀へて。與に酒を飲る晝夜ゆしく。潛に家を出て。忠義祠の池中に身を投じて死ぬけり。忠義祠は故宋信國。文天祥及。姚岩。陳焰。王安節以下の十三人を祀りくある所也。姚陳の諸公は皆宋の末に城州を守る士也。城陷てく死せり。其後は宋史并に郡邑に記えたり。さて士鳳が死せる日の知る者なり。曉に及びて其僕こるく市に哭して曰我主人死せる戸を見る

に得ずと。遂に池の旁に雙の履あるを戸を得たり。是より前士鳳いまだ死せざる時。ひそかに紙を剪て位牌とす。明布衣石士鳳之位と書て。忠義祠なる十三人の下に置きたり。又其隣なる棺を賣者に三金を與へて曰。世亂てく吾此金を用る所なし。姑汝に寄るなりと云ふ。後に士鳳死しける時。棺を賣る者來てく葬送の用意をぞ為ける。其僕も終身妻を娶らざりけり。

凌國俊等九人

崇禎癸未の年。賊（賊は朝敵を云）武昌（地名）を破る。岳州（国名）を襲ひ遂に長沙（地名）に討入ぬ。司理（官名。日本の刑部）蔡道憲力盡てく危急しく待に。賊刃をあげて斷らんとするに怒罵てく止まず。賊其足を斷ちぬを以て揮に。又

ひを断て遂めづ〻〻め断殺さる。天子命わて太僕寺少卿官名の官を贈て。忠烈と謚し王て。初道憲ゞみまろりめたろて。浚国俊等国俊を初めとして九人の者。道憲め従て去らど。賊此者共をて道憲め降る事を勧め〻む。國俊曰。我公節を屈さざる人なるべ。吾等とてよわて去て今日を俟じと云ふ。賊刀を以て之を脅せば。復咲て曰。吾等死を畏ぶべとてよわて去て今日を俟じ。賊あせて之を殺す。内め四人が曰。願て八我主の骸を葬て後め死め就ん。賊義として之を許す。時め四人衣を解て道憲ゞ屍を裹て。之を南郭地名南の郭外也め葬て自刎て死す。国俊ゞ婦年少し。其子文志を撫して節を守て居て。常め文志め向て父の國の難め死せるゞ悲る。文志孰政の人くのりくめ行て歎き訴ふ。权国俊を以て忠烈公の祠堂め附して配しまつりたり。

蕭効用

蕭効用ハ漢上の蕭亮宋ゞ僕て。宋孫景之と云者の田地を買て。景之め佃をすきしめ。歳ごとに其租を納しむ。一日効用主人の命を受て租五十金を集めて。家め帰るとて一里許を行くめ景之與と計路めして之を奪へて。効用官め至て之を訟へ出べ。官急め之を捕へんとて。景之窘らまて又衆を集め。効用ゞ夜宿せる處を同ひ。炬を列ねて四方を圍て。棒を下すること雨の如し。旁の一人の兇者老媼と一刀め断て。蕭亮宋人を殺せりと大め呼て走り。此る亮宋ゞ露知らざるるるまでも。竟め因らまて獄め入て。死刑ゞ行るんとて。効用物狂ひの

如くなるべく。日夜走まわりけども為んすべなし。こゝに解せる者に遇て
いづくせば好からんと云へる事を解せる者給て曰。汝主人の代て死る主
人の命生べし。効用喜て大に喜び。冤に陥りたる由を文にかゝり。又密
に鍛冶を頼て一尺ばかりの刀を打せて之を佩びさて遍く一族の者
に辭し。主人の婦の前に跪きて。とかくに自愛し玉へと云て。一語も
已ず妻子の上に及べどもしく行きたり。時に按察御史目付應公と
云る人獄を巡り玉へ日ゆく。主人の蕭亮宋も蓬首にして。囚人の中に
在りて生ける人の如くなりて。効用其側に伺しが堪ずして忍びて。忍
左の手に冤状を持て。右の手に利刃を出し大に呼ぶ曰。天なる子孫氏
の老媼を殺せる者に亮宋に非ず。斯云へ蕭効用なりと云て自刎て。血

ほとばしりて御史の憲堺を赤くし。應公の繡衣に濺ぐ。應公
大息しく其状を署し。命じて入に負せて出さむ。出て目を閉
て正氣無けれども。口言ちんと欲するが如きること三日。幾ばく両眼を
開て。少く正氣つきて曰。吾死しく主人生るべし得ずして徒死すると
云へり。守る者告て曰。汝已に生ぬ。慎まるべしと云へり。効用遂に死し
を年三十八なり。時に按臺より諸の監司に及まで。憐て葬の費
を玉へり。さて景云へ捕へて獄に入り。亮宋へ免て家に帰る。

孔四郎

勲衛の地名嘗守経へ鳳陽地名の人なり。優人孔四郎と云者を愛し
らく。孔四郎へ紹興地名の人なり文に通じ誼を尚び。嘗て恩情に感

じく遂に身を寄せし之の事の嘗常の縉紳の家に出入せるに必ず孔四郎を伴ひ行く。嘗武職なれども家大に富めり。闖賊李自成と云賊乱入せと聴く嘗四郎と謀り蓄へる金を他所に埋む。賊将宮撫民と云者之を知り嘗を搏き拷問せ。次に四郎を執へ責め問へ四郎已るを得ず金を埋む所を云。嘗へ囚とられ入ると共に害せられぬ。撫民四郎が姦しく又美なる妻以て醜き四郎に歌へ舞へ楽む。夜に入り撫民が睡れる隙伺ひ孔四郎潛に刀を抜き刺殺さんと云るが心せるとき撫民覚て声をあげ呼ぶ四郎去そんじ遁るべきなりと知て刀を提き罵て曰。我嘗守経と骨肉の親なれども勝て。生死を同くせんと誓へ。奴其

財を奪ひ又其命を隕せり。我今守経が為に仇を報ぜんとて事を為さば。死しても鬼となりて賊を殺し。守経が為に仇を報ぐと罵て遂に殺されぬ。

費宮人

費宮人年十六なり。何れの處の人なるか知らず。容も意も勝れたりとぞ。明の懐宗帝后に計へて御女の長公主帝の御女を公主と云の侍女となり。王に公主憐れみ深く宮人帝の周賊が国を乱る我憂王に愛を。女心に病みうれひ泣をりて。侍臣王承恩に向ひて寂のありさまを我問ふ。承恩曰。汝深宮に居て此を知や。何ぞ。宮人曰深宮に居るが故に知らんや。頭せんすべを

費宮人闖賊の
為め公主と
偽つて新婚の
帳より羅姓を
斬る

覚悟せん為なりと云ふ承恩意ふ之を奇とす。斯く哀のみく熾ん
なる帝の憂のみく深ければ。宮人承恩を問責るのも愈甚げ。
承恩曰故いかんぞ他人に向はざるや。宮人曰朝臣
皆怠すく一人も君と図る意ふ者なし。吾公が忠誠なる紋知れり。
故に相向のこと。承恩益奇とすく曰。汝願計んと云其計如いかん。宮人
曰り不幸ならば惟死せんのみ。然れども徒に死さべからず。承恩曰古人の
詞に生る者とすく死るなり。死せる者とすく復生ずべし。生る者其
言を食ずんぞ信と謂つべし。汝之を能せんや。宮人曰其時に至らば公
つべし。茲に又魏宮人と云者あり。年費より長じく是も貌美
なり。素より費と相善。費ゞ言を聞く曰。故ゞ計甚成難し。吾を

難とすれども能はず。其時に臨まば死し〳〵く忘を伸べんのみと云。承恩
之を奇とす。甲申三月十九日。闖賊李自成都城を破る。王承恩
走て帝に報ず。帝后と泣く御いとおひ有り。宮中の人うよび居
て泣ざるなし。后自縊まく失せ玉ふ。寵愛の袁貴妃も同く縊
ぬ帝剣を抜て妃数人を斬に御玉ひ。公主を呼くのたまはく。爾年十五
何ぞ不幸ふしく我家に生まれたるやとの玉ひく。左の袖を御泪を掩若
のみに刀を振て。公主の左の臂を断玉ふ。公主死し〳〵ぬ。帝
御手慄て殺し玉ふに忍びず。承恩と共に南宮に至り。萬歳山の
壽皇亭に登りて御ずらう縊まく玉ふ。承恩もつゞいて縊まく生せ
けり。時に尚衣監（尚衣は帝の御衣の類裁縫つくろを掌る役監は其あづかる日本の縫殿頭に中る）何新と云者。趨て宮

の入て帝を見まゐらせ給へども。たゞ公主の地の仆まさまを工人。他の宮人悉く道を去て。費宮人のみ側の哭し居たり。相共の救ひ奉まを。ゆかうなく甦せ玉ひて公主のたゆへく。父帝我の死を玉へり我何ぞ敢て生を偷まん。其うへ賊至らば宮中を索めて我を捕へべし。いかんぞ逃るゝを得ん。宮人曰願くは公主の御衣を婢に賜へべし。婢賊を詐て公主を脱せ奉ん。落行給玉へ何方が好らんと云へば。何新が云囲丈の第可なるべしと云て。公主の衣を宮人に與へ泣く別まを玉へ。何新あらゝ〳〵公主を背に負て出ぬ。扨李自成は承天門を破りて宮中に乱入らんとする時。魏宮人大に呼て曰。賊大内に入まを我輩必ず辱を受ん。志ある者は早く計るを為らと云て。身を躍らして御河の流まに沈む。此に従ひて死す者三百人ばかり。水紅粉に深まりて河水赤まを為に流まゞ芳き香数日絶ざりけり。費宮人を入て公主の死せる式を送まて。我衣服を脱て公主の服を着し。井の中に匿まを居給を賊引出して李自成に見えしむ。宮人曰我は長公主なり汝無禮をなさまと云。自成乙中に其美なる式喜び此式納まんの意あり。自成又天子の御座に陞らんとする時。忽目眩き神消るが如くして白衣の人長数丈なるが前に立て帝も亦傍に在まと覚て心に大なる恐まを。此に依て長公主を以其愛将なる羅姓に與へ此に閩賊が下に殊に軍功ある者なり。其勲功の賞にとて與へ羅喜ぶる甚。宮人曰閩が言吾背く。然まども我を帝の子なり。汝祭を

設て先帝を祭り。且難に従へる大監王承恩を其側に祔し祭り。殷勤の禮を盡さバ我汝に従ん。羅更に喜て請ふ儘に従ふ。宮人泣て先帝を拝し又承恩を拝して曰。王公王公爾能死して復生ん以て吾言を聞んや。吾前の言を践んと云て泣ぬ。諸賊大に楽みを張て羅が新婿を賀す。羅いたく飲て大に酔て内に入る。宮人又酒を具て新婚の盃を勧む。羅大に誑みて引つゞけ飲て。吾子を得るも闖王の恵の厚が致す所なれバ。一通の文を上まて謝を述んと思へバ書をあたへよと云ふ。宮人曰是ハ難きことに非ず。我よく此をあたへてむこ間君ハまづ寝玉へ。書し了らバ君を起して見せまゐらせん。羅愈喜びて臥仆して鼾の声雷の如し。宮人侍女を屏け獨燈を挑げて

坐も。奴内外共に寂として静まりぬれバ。匕首を取出し羅が喉をぐさと刺さ。羅躍り起んぞと仆るゝのあやうきこえあり。衆賊此声に驚て戸を排き入て救はんとするに羅はや息絶てあり。傍に華燭あかあか明らかなるに。宮人を見れバ正く坐して物いはず。審に是を視れバ我と項を刺て悠然として逝ぬ。疾自成に告けれバ自成駭き歎じて禮をもて此を葬せけり。此を公主の死して王へ報ありと思ひて復公主を索むるをせざりけり。

呂尼

明の正統八年。英宗皇帝親師を帥て。北虜の酋を征し玉ふ。御駕を出させ玉ふ時に陝西の地名呂尼馬を叩て諫て死しぬ果して

此戰利あらざど帝北虜の囚と成玉へ。其後英宗重祚し玉ひ順天府の保明寺を建立し尼の肉身を寺中の祀玉へ。俗の此寺を皇姑寺と稱せり。雅望曰據資治通鑑三篇及皇明通紀等英宗征也先在正統十四年今云八年者疑誤

瓊枝曼仙

明の末の張献忠と云者。荆州国各を破へ惠府惠王の樂戸数十人を召く酒宴をなせ。妓の中の瓊枝と云者色藝ありて。献忠の瓊枝の命じて歌はしめんとせ。瓊枝曰我身賤といへ共何ぞ歌ひて賊の觴をさしめんやと云て。後ハ怒て刀を拔て瓊枝を挾む。瓊枝曰汝が為をなる此の止まるなら。我死を畏まず我をいうとう為んと云。献忠いよ〳〵怒て瓊枝が身をすこの間のこと〳〵く犬の食せり。又同時の曼仙と言者あり。献忠召て試むるの此をむこくのみを盡て歌ひ勤て意の叶ハざるが故の献忠大の悦び寵愛せり事比なし。献忠毎夜寢んとする前の必大の酒を飲む。曼仙傍の在へ。曼仙ひそかの毒を酒の入れて盛て献忠の飲しむ。献忠酒の毒あるを知らず眠睡するあるの曼仙が頸の刎をかけ引よせて汝先飲よと言。曼仙否まんとせども免れずして取て飲て立ぬ。献忠始て覚へて其尸を磔の せりぞ。献忠が勢ひ猛なれば土を守る諸臣ハ皆逃げ走へ。或ハ降へて臣となるもあり。瓊枝ハ娼妓の〳〵て身を顧ずして死なる。忠臣義士の為所の劣らぞ。曼仙が毒の計ハ事成りも成らざるを死を免まじと覚悟

一家ゆるす。若成あび國の為ゆ賊を殺せの功大なるゝんを先飲く
斃るのあるべきを其俠烈の氣千載の人をして憤し且歎せしめ
ゆらんや

義象塚

馬隆州のうちゆ義象の塚あり。明の天啟年号の間水西地名の安氏叛きく
衆を率て州を犯す。滇省滇ハ國の名省ハ其國のやうなり姚せだの備をも撫軍目付よりて
陶土司陶氏の庄屋ゆ調て凛ゲむ陶ゥ家ゆ一ッの象を畜て日の暮る比山洞
の中ゆ伏して鼻ゆく泥水数斛を吸て大ゆ哮跳て直ちゆ賊壘ゆ至
て鼻より泥水を噴て賊ゆあびせる。賊駭てまた鼻ゆく賊を巻空
ゆ擲て墜し死る。陶ゲ股肱と頼める勇士機ゆ乗して北る我逐て大ゆ

捷るのを得て。暁ゆ及びて師を収め退く時象毒矢ゆ中て斃る。
土人此を德として南山ゆ葬て冢。今ゆ至るまでく春秋ゆ其塚を祭て
輟むを爰る。

義牛

義牛ハ宣興の銅棺山の農人吳孝先と云る者の家ゆ畜る牛あり。力
わりて德あり。日々ゆ山田を耕さるゆ二十畝飢るゆ甚しとゆ先田の苗を
食ふるゆ。孝先寶として養ゆ孝先ゲ一子希年とて年十三ゆなる
ゲ。牛の背ゆ跨て行ふゆ乗て遊ゲ牛澗水のほとりて草を食み
をるゆ。忽一ッの虎あて林中より出て牛の後より伺て希年を攫ん
とす。牛此を知て身を旋して轉じて虎の方ゆ向ひ徐ゆ行て草を噛む。希

年惧まて牛の背に伏て動ず。虎牛の歩を来て見て踞て候つ。牛虎のそば近くありて遠に歩を斜て力を出して虎に觸る。虎は牛の背なる小児の目を突て避るに及ばず。牛の角に突倒されて其侭狹き澗の中に落て身うごきもえ為ざるに。水は堰るを深くふかさ増て虎の頭を浸て斃けり。希年牛を駆て帰て斯と父に告げて衆人を集め虎の死して居る處に至て舁持来て此を烹て喰ひぬ。茲に孝先が鄰家に王佛生と云者あり。孝先と水の論をして争に佛生家富て恣なる行をして村中の者常に悪て居て此度の争佛生が無理なる由を人毎に云て孝先をひく。佛生ますます怒て其子を率来て孝先を毆死せり。希年此事を官に訟へ。佛生邑令代官に厚く賂を贈て免れて反て杖を希年に加へ遂に希年を杖下に斃しぬ。希年外に兄弟なく此冤を白す者なし。孝先が妻周氏日に哭して歩びて止まざる。ある日牛の前に至て泣て牛に謂て曰暴に幸に汝が力を以て吾児虎口を免れて。今父子俱に讐人に死されぬ。徨天石土雖あれど吾に恨を雪ぐと云て伏沈て泣く。牛此言を聞て大に怒て抃ひ鳴きて飛出て佛生が家に至る。佛生父子三人客に向ひて酒飲居るに想て牛登て来て先佛生を觝斃す。復二子を觝て斃す。客棒を持て牛と闘に者は皆傷を蒙る。鄰里の者異て邑令に白す。令此を聞て怖れて其やがて息絶て死に。抑人の子の不肖なる父の仇ありても報えざる者あり。此牛呉氏の為に父

子の仇を報ぬ牛めいとく義を知るとく今が之を聞く怖死せるも理ぞかし。

義馬

義馬ハ吉水地名の王禎が乗る所の戰馬なり。明の成化二年丙戌王禎曼刎の国名通判なる時重役の官名荆襄地名の賊等刼しく境内へ入しかば王禎向て之を征せんとて同知の王某賊を怯れと王禎とむを合せず。指揮官名なる曹能栄成ハ元より王某が與しく伴とく。王禎を欺く大昌地名へ走とく戰ふ毎しと云とく共に出陣しく。王禎を深入させく両人へ引返しく道を返すあり王禎尼中へ陷りて大に叱しく賊を罵る。賊怒とく王禎が喉を断て又左の股を断とく殺せり。王禎が馬死走りて府門へ帰りて人々が門閉とく入るに

得ず。長嘶とく扃を踏む其さま哀状を告るが如し。守る者戸を開く此を入れとるるに血に染まく鬣も紅なるなり。大昌の地境を去ること三十餘里あり。衆始とく王禎が討死せりと知とく殺さず。然れた賊のやぐら圍と退るぞ後二十五日ありく尸を取とく棺に收む王禎が子に廣と云者あり貪めしく家へ帰るるのあり。是非とく行李並に馬を售んとす房に王某意に馬を買んと想とく云とく竟に値を遣らずしく馬を取る。棺を送とく二十五日を過しく夜半の比馬哀く鳴るに甚異し。王某林飼者に疑ひく自往とく櫪厩を見れば。馬驟に前来とく項に噛つき久しくしく離しと又首を奮ひく其胸を搏きく地に仆しる。翌日王某血数升嘔く死

せり。賊平ぎて有司殺人賞罰のさたせん時両人の指揮へ殊せるとぬけり。

秦氏犬

秦邦が明の永樂年の時の人なり。家富て幼き子あり。京へ往んとて卜ふに不吉なり。妻も留けれ共聽ずして舟へ乗て往んとす。家へ白犬あり。秦邦が裾を咬て留るさまをす。秦邦悟らず此犬をも挈て階へ舟へ乗て行る。張家灣と云所へ舟を泊るへ盗賊王甲王乙と云者刀を按て舟へ入秦邦を刺殺す。犬後艪へ躍出て賊を噛んとす。賊刀を拳て逐ひ水へ飛入て遁去る。二賊敗を奪て尸を水滸へ埋て去ぬ。犬二賊の後へ付き往て賊の家をうかゝ。又帰て来て

秦邦が尸の處へ至てくゝ之を守て。晝へ食を乞ひ夜も其側へ伏き。斯て月を経ぬ人あり怪奇也と云々。其比廻河御史呂希望と云人此事を検分しあり。犬へ向て呼て前へ向て跪く。其さま訴るに似たり。呂御史異ものなりとくゝ曰。此冤を訴るならんとて吏を犬の傍へ遣せり。犬尸を埋る所へ往て足へて土を爬る。寄て視れば人の戸あり。呂が云此犬の故主へくゝ害せられしとぞ云。犬へ向て害せる者を知りやと問へば犬尾を揺して先ぎて往く。吏犬へ付て行る一里ばかりあり。家あり。二賊人を集へて酒飲て居る。犬元入て甲が衣を噛て次へ乙が履を噛へり。吏犬へ縛へて御史の前へ引来て拷問へ責めけれ共服せず。時へ人あり入て跪き泣て曰。其尸あそ我主也

曹能柴成よ
欺きす
王禎賊軍の
中に
忠死す

おなせ。我も主と共ふを負しが。水ふ落入て不忍殘ふ泳ぎつゝて命
ばかりうまとと云。二人の賊遂ふあり〜ゝ事を云て罪ふ伏しぬ。此僕棺を
その戸を載せて帰るふ犬又之ふ隨て往々。昼夜柩の傍を離ず
ど時〻声を挙て悲號せ。見る者涙を隨さるるもの。帰て つゝて葬を
なせ時犬柩ふ隨て墓所ふ至て。葬を畢て見て大ふ號び〻傍
なる木ふ觸て倒れ死ふ〻。人哀て秦邦が塚の傍ふ埋〻とゝむ。

義犬

丙申の歳の此太原地名の客。南方ふ賈して還るとて。槖ふ金五六百
ばかり入れて持て。中牟縣村名の境を過とて道の邊ふ憩て居々る
ふ。傍ふ若き男の犬を棒ふ縛て荷きたるが同さ所ふ憩て居ぬ。此犬

客の方を向て哀げなる声を出して鳴く。其さま救ふ様よと云が如し。
客忍びずして錢を出して犬を買て放ちたゞ遣る。少年客の懐中
の重きふ眼をつけ潛ふ跡ふ付き往て人無處を見合て一棒ふ彼客を搏
殺して。小橋の下の流ふ戸を曳往て葦ち上ふ掩ひ懐中なる槖を取て
背ふ負て往る。犬ハ客の殺さるゝ様見て少年の跡ふ付き。往て
其家を認て帰来て直ふ縣中の衙門ふ走て往々。縣令を
座ふ升て獄を聽王ふ時なり犬地上ふ伏して號び哭るが如訴るが
如し。吏ども茂驅へども去らず。縣今日汝何の冤なる吾吏を遣て汝ふ
隨ハしめんとて。吏ふ命じて犬ふ隨ハむるふ犬吏を導て走て。客の死
せる所ふ至て水ふ向て吠る。吏葦を掀て戸を見て又帰て其由を

敢て想ふに賊を捕へんがゝ無しと申す。犬使に隨来たりて弥る前の如し。縣令曰汝能賊を知るゝ我吏を遣て汝に隨はせん犬又出んとを縣令吏に仰せて数人を遣て犬に従はしむ。凡行る二十里あまりに〳〵く村あるを。なやしの人家ある所に至て一少年をうへて犬跳て其臂を噛て血を出す。吏ども之を縛て縣に至て拷問〳〵すれども遂に罪に伏〳〵ぬ其金を問へば尚在りと白状す。吏を少年が家に遣へ〳〵之をみるに〳〵めうへまで藁中に小き籍あり。居所姓名を記す。縣令の小年を獄に下す〳〵藁中の金は籍て官庫に納めり。然るに犬又縣令の前に至りて吠てやまず。縣令曰客死〳〵直共其家尚あり。此藁金他が家に與ふ〳〵とあやと云て又吏を太原に遣て王が犬も亦後につゝて往ぬ。既に至れば其家始て主人の死せる事を聞て驚き又藁金恙なる由を知て大に感じ且泣ぬ。客一子あるを伴ひ旅装して吏と伴ひ来ける賊は獄中に死〳〵ぬ。縣令藁を見て其子に與へ王ひぬ。其子槻を囮に送て返れば犬又役ひ往く。凡数千里の旅の途を或は宿〳〵或は憩ふるに人と聊も違ざりけり。

毘陵猴

萬歴年中毘陵地名に乞兒あり。日々一猴を繋ぎて街坊に至て技をなさしめ銭を索む。数年を積て五六金を蓄へ不圖同伴の一丐と酒飲けるに酔て之を誇て云ふ。丐聞て悪心を發し毒を酒に入て強て飲せ〳〵れば竟に死〳〵ぬ。其藏める金を取て尸を野外に座めり。人知

あるりなり。多く猴のこ彼に従へざ。依て日に鞭うちなれで猴勉めて之に隨ひ。一日猴何くへ往くを見えず。此時縣尹代官張廷傑と云人初て此の司に仕へて。堂に升り玉ひて一の猴来て丹墀の下に跪き〻跼ぶ張廷傑ひそく異なりとして一隷に命じて猴の往方に従へしむ。猴前に立て養病院施行所に至りて丐を覓て居らず。復隷を拉て行途に糕餅を乞養生所て、隷に與へて黙心とあさしむさく行て大市橋に至りて丐に逢へて猴両手に拽きて丐が肩に跳り上り頰を打ち面を抗きて隷執へて縣に至りて張廷傑鞫問して玉ふるの再三あるて丐始て辜に伏しぬ。隷をして丐を伴はせ銀を取らしめたるに包裹ありて在り。扶野外なる浮屠土の所を堀るに尸出たるを棺に入て火を焚く時猴火中に入て焚け死しぬ隷其由を縣に申すに張廷傑驚き異しみて且感じて玉ひて。義猴記と云文を作りて石に刻て末世に遺されたり。

義鶴

審山の周氏鶴二ツを畜へり。順治乙酉の年周氏門を閉て死せ。四の乱に兵鶴を奪ひて溪上地名の陳氏に鬻ぐ。然るに其雄主の別を哀て鳴て食せずして死せ。雌他の雄と偶せず。一日野に翔て審山の浮圖塔の上に飛て羽うちて百里を去のごとく審山に至りて。浮圖のあたりに徘徊すること三日なり。周氏の僕某之を聞て往て観るに。鶴僕を望て踊て懐に入て出ず。僕携て家に帰て飼ふに貧しければ。魚又粟を與へる

つゝらゝゝ。鶴ゝゝゝ竈下に至り洗ひ流せる餘粒を啄む。或は竟日飢る
るも有と。毛羽も凋ゝとして共他に往返す。知る者はまどゝ皆
泣くとぞ。

竈

康熙七年。松江の黄浦の漁人一ツの竈を得たり。徽商あり銀三両に
買て浦に放ちて遣ゝ。漁人商の銀を多く持て夜舟に入
り。刼ゝて先舟子と小僮を殺し商晩て玉へと云ゝて盗其
手足を縛水中に投入れ。然る水中に物あり浮て員の如く。流に逆て
上行ること二十里許せり。夜明て舟の来る所見て。商声を挙て命救
玉へと呼ぶ。此舟は巡兵なりゝ。大竈の人を員ひ来る所ゝ其故所を。縄
を解労りて。恐らくは其漁人等成べしと云。竈又流に隨ひ
下り往けば衆悉此に遊て往に。昨日竈を買し所に至りて竈忽
水に沈めぬ。漁舟うちに在て銀を分ち居ゝ。巡兵舟に乗入て盗を
搦めしゝ。奪へしゝ銀四百餘両一厘も少ずゝ有。盗を松江府
松江の地名府は役所に送りて罪を問へば。商は舟子と小僮を殺されば其ヤ郷に
帰ゝ。太守に乞へば。知會文書を出る。盗をせし漁人共は立ち
ろに斬て一人も脱る者なしゝ。